
12月のラブソング

としくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12月のラブソング

【Nコード】

N3177D

【作者名】

としくん

【あらすじ】

12月24日、クリスマスイブ。街は活気に満ちている。寄り添うカップル、荷物を手に抱えた者達…皆この日を心待ちにしていた。橘しずるもその一人だ。だが、ある一本の電話が彼女の心に深い傷を作ってしまう。クリスマスに起こる一つの奇跡の物語…あなたは、誰と過ごしますか？

遠くから雪の吹雪く音が聞こえる。どうやら、外は猛吹雪のようだ。僕は震える手を抑えながら手袋を外し、腕時計のライトをつけた。

AM 20 ; 32 ...

遭難してから約7時間が過ぎた。かろうじてビバークで吹雪からは身を守ってはいるが、長くはもたないだろう。目がかすむ。手足の感覚はすでに遠くへ行ってしまったようだ。周りは暗く、吐く息の音が響く静寂だけの世界。ふと暗闇から光が見えた。

良かった、救助だ。

そう思った時、光の中から人影が現れた。ゆっくりと近づいてくる。そして僕のそばまで来ると、その影は微笑んだ。

「しずる…来てくれたのか…」

街は人の群れでいっぱいだった。どこを見回してもカップルや大きな荷物を抱えた会社帰りの人ばかり。でも、みな幸せそうだな。なぜならば、今日は十二月二十四日。クリスマス・イブである。シヨップのウィンドウはきらびやかな装飾に飾られ、入り口ではサンタと可愛いツリーが客を出迎えてくれる。一年で一番、恋人たちが幸せを噛み締める日だ。道行く人はみな浮かれているように見える。冷静なのは自分だけだと皆思っているだろうが、皆同じだ。

橘 しずるもそう思っていた。すれ違う人は皆カップルや荷物を抱えた男性ばかり。皆私とすれ違つと、会社帰りの格好だからイブは予定が入ってないとか、今から大急ぎでシングル組でイブ乗り切り大宴会だろうとか、勝手に想像するんだろう。確かに、さっきまで会社において仕事してたけど、ちゃんとイブは予定入ってる、シングル組とはとうの昔に縁を切ってる。なぜなら、二年前から交際を

始めたからだ。しかも半年前にプロポーズされて、三月には結婚。そのまま寿退社の予定なのである。出会ってから何の障害もなく、彼とはここまで来れた。今まで散々な恋愛ばかりしてきたけど、今度は違う。全てがとんとん拍子にきている。やっと幸せが私に舞い込んできた。しずるは舞い上がっていた。そして、今日は愛する彼との独身最後のイブ。最後だから盛大にしようとの彼の提案で、明日は休みを取り、今日は高級フレンチでコースを食べ、そのあとは高級ホテルのスイートルームで彼と一夜を過ごすのだ。全て、彼が手配し、段取りしてくれた。少ない給料のなかからやりくりし、今日を用意してくれたのだ。しずるは彼のそういうところが好きなのだ。いつも無理しているが、何かと思い出を作ってくれる彼のその心がとても嬉しい。

愛されているんだなあ…

しずるは実感していた。

しかし、彼女もされてばかりではない。これぐらいはと思い、彼へのプレゼントも用意したし、クリスマスケーキだって準備している。『アルプレット』というケーキ屋が会社からさほど遠くない所にある。この街では聞けばだれでも分かるくらい有名な店だ。その一番高級なケーキはすでに予約がいっぱいだったので、彼の好きなチーズケーキがベースのタイプにした。時計に目をやると七時半。店の閉店は八時半。まだ間に合う。走らなくても間に合うが、彼との約束の時間があるのでどうしても走ってしまふ。人ごみを勢い良く駆け抜け、店に駆け込んだら時計は八時十分前を指していた。さすがにこの時間になると、店内は静かだった。さっきまで人がいっぱいだったのか、店内のショーケースにはほとんど商品が残っていないかった。カウンターに人がいなかったたので、レジの前まで行き、置いてある呼び鈴を鳴らした。

「はい。」

奥から返事が聞こえ、店員がのっそり顔を出した。

「あ、あの…ケーキを予約した、橘と言いますが…」

「ああ、チーズケーキのお客さんねえ。ちょっと待っててください。」

そう言う一旦置くに消え、再び出てきた時には可愛らしいリボンのついたケーキのケースを手にとっていた。

「予約してて大正解！ついさっき最後のケーキが売れたんだよ。君が本日最後のお客様だ。」

そう言うレジを打ち金額を出してくれた。しずるが代金を支払うと、

「これはサービス。」

そう言う、店員はサンタとトナカイの形をしたらうそくを袋に入れてくれた。

「メリークリスマス。」

店員はにっこり微笑んだ。

しずるは、はやる気持ちを抑え、勢いよく寒空の街へ駆け出した。彼に早く会いたい…

だが、浮かれていて前がよく見えていなかったせいだろう。通行人と正面衝突してしまった。二人は思わず尻もちをついた。

「あいつたあ…」

「大丈夫ですか？」

しずるの目の前に手が伸びてきた。

「あ、ありがとうございます…」

手を取り立ち上がると、ようやく自分が人とぶつかったのが理解できた。

「すごい勢いでしたね、びっくりしましたよ。」

目の前の相手が微笑んだ…と言うよりは口もとが笑ったのだ。良く見ると、ほっそりとした長身にカーキ色のロングコート。そして頭には深めの帽子…まるで冬のヨーロッパの男性みたいな格好だ。顔は暗いせいか、良く見えない。

「す、すいません！あわてていたもので…」

しずるは急いで頭を下げた。と同時にあるものが目に飛び込んで

きた。ぐっしやりと潰れたケーキの箱：さっき彼女がケーキ屋で購入したものだ。

「あー！ー！！！！」

人とぶつかっただにしてはお互いにダメージが少ないと思っていたが：まさかケーキがクッションになったとは：

彼とのイブを祝うためのケーキ：

しずるの口からは白くなったため息が出た。せつかく用意したのに：喜ぶ顔が見たかったのに：

「あの：すいません。」

相手の呼びかけでしずるは我に返った。

「：大丈夫ですか？」

「は、はい！あの、こちらこそすいません！いきなりぶつかったりして：ご迷惑をおかけしました。」

しずるはまた頭を下げた。帽子の男はゆっくり口を開く。

「ケーキ：駄目になってしまいましたね。」

男は残念そうにつぶやいた。少なくともしずるにはそう聞こえた。

「コート：汚れてますね。」

男が言った。しずるは、え？といいながらコートを見ると、後ろに泥がべったりと付いている。さっき尻もちをついた時だろう。色が白だから余計に汚く見える。

「クリーニングしないと。すいません、僕が前をちゃんと見ていなかったから：」

そう言いながら、男は財布を取り出すと一万円札を何枚か取り出し、しずるに渡そうとした。彼女は断った。

「気にしないで下さい！元はと言えば私が悪いんですから！気になさらないで下さい。」

しずるの反応に彼は少々戸惑った様子だ。そうですか、と言いい札を財布に戻すと変わりに小さなカードを取り出した。

「名刺なら、もらって頂けますね。」

彼は優しく言いながら、しずるの手に名刺を置いた。

「クリーニングの件、貸しにしますから。何かあったら連絡下さい。」

そう言うと、彼はすっと歩き出し夜の闇に消えていった。しずるは手に置かれた名刺に目を通した。

輸入雑貨・その他取り扱い

<株>浪漫堂 代表取締役

金田 平助

T e l 〇 〇 〇 〇 - 〇 〇 〇 - x x 〇 〇

しずるは不思議な気持ちになった。

あの人…似ている…仕草も、しゃべり方も…

しずるは潰れたケーキの箱まで行くとしゃがんで片付けようとした。その時、携帯電話が鳴り出した。取り出して番号を見ると、登録していない番号からだ。

またいたずらだろうか…？

不思議なもので、今日だけで五回あった。これで六回目だ。しずるは恐る恐る受話ボタンを押した。

「…もしもし…」

良かった。今度は相手がいる。だが何か様子が変わる。何かまくし立てている。

彼が…遭難？遺体で発見された…？

しずるは驚きのあまり携帯を落としてしまった。

携帯からは、まだ相手の声が聞こえている。

葬儀はしめやかに行われた。しずるの恋人、広瀬 昇平は、スポーツインストラクターをしていた。毎年この季節になると、仲間とこぞってスキーに行っていた。今年はたまたまクリスマス前じゃないとスキー場が空いておらず、独身最後という事もあり、皆で出掛けたのだ。だが、スキー場の天候は悪く、最終日になってやっと回復した矢先の遭難だった。昇平はコースを外れ、谷の中腹辺りでビバークをしていたが、再度天候が崩れ、発見が遅れたという。発見された時、昇平は少し微笑んでいるような、安らかな顔だったそうだ。

しずるが恋人であり婚約者という事で、昇平の両親は親族席に招いてくれた。式の最中、母親はしきりに

「ごめんなさいね…」

と繰り返していた。しずるも涙をぬぐいながらうなずく事しかできなかった。父親は挨拶以外、終始黙っていたが、いざ出棺となったときに彼の名前を叫びながら抱きついた。火葬場でも、骨となって姿を現した昇平を見て、

「早すぎる…親不孝物が…しずるさんをどうする…」

と泣きながら壺に骨を収めていった。母親が「しずるちゃんにも…」と分骨しようとしてくれたが、彼女は丁重に断った。自分のそばに置いておくと、思い出して前に進めなくなりそうだったからだ。今は一人がいい…しずるは心ここにあらずといった感じで帰路にいた。

アパートに帰り着くや、しずるはへたりと座り込んでしまった。部屋を見回すと、昇平との思い出の品がたくさん残っていた。片付けようと思いながら手に取ると、彼との思い出ばかりが溢れ出る。もう少し…

私があなたを忘れるまで…思い出にできるまで…もう少しこのままで…

途端に涙が溢れてきた。自分でも驚いてしまった。葬儀でもこんなに泣かなかつたのに…ひとりになった途端、涙がとめどなく流れ出した。昇平の存在はこんなにもしずるの心を占めていたのだ。涙がこぼれるたびに昇平の顔を思い出す。笑った顔、起こった顔、寝ている時の顔、しずるが困らせた時の顔…数え切れない昇平の顔。いつか忘れてしまっただろうか…

どんなに願っても、一度死んだものは蘇らない。どんなに会いたくても、どんなに切なくても、どんなに愛していても。

そのうち、しずるは深い眠りに堕ちていった。

朝目覚めると、しずるはベッドの上にいた。

「あれ…昨日たしか…」

しずるは不思議に思った。昨日は昇平の葬儀から帰った後、そのまま部屋の真ん中で眠ってしまったはずだった。いつの間にも移動したのだろうか…。窓からは太陽の明かりが漏れている。ふと時計を見ると、七時半を指していた。

「会社…間に合うな…」

しずるは軽くシャワーだけ浴びると、さっと服を着替え、化粧もそこそこに部屋を飛び出した。朝食は休みの日にしか食べないことにしていた。そのほうが朝ゆっくりできるからだ。しずるは軽く駆け足でいつものバス乗り場まで来た。よかった、いつものやつはまだ来ていない。彼女は辺りを見回した。いつもと変わらぬ朝、変わらぬ風景。違うのは、彼女の心を開いた、大きな穴だけである。

彼女が勤める会社は、中小企業でもある広告代理店だ。彼女はここの営業課に勤務している。成績は、そこそこ優秀だ。勤め始めて六年は経った。入ったころは分からないことだらけだったが、今では約100人近い顧客を持っている。仕事の多くは広告のリピート出版だが、気に入ってもらえれば紹介という形で新規開拓も可能だった。彼女はその口で顧客を広げてきた。評判は上々なのだ。

「おはようございます。」

しずるが事務所へ入ってくると、課長が寄ってきた。

「橘、しばらく休んでいいんだぞ。あんな事があったんだ。無理するんじゃない。」

「ありがとうございます。でも、今は仕事をしていたほうが気が紛れるんです。それに十分休ませて頂きましたから。仕事もたまっていますし…」

そう言って一礼だけすると、しずるは自分の席に座った。机の上には、休んでいる間の伝言がベタベタと貼り付けられている。

「高村じゃ処理できなかったか…」

高村というのは、しずるの二年後輩にあたる高村樹の事だ。一生懸命だが、なかなか仕事を覚ええず、今でも課のコピー係りをしている。だが、しずるは見込みはあると思い、仕事を少しずつ回していた。結果は、全て成功に収めている。しかし、今回留守の間、思い切って任せてみたが、少々力不足だったようだ。しずるはふうと息つくと、貼ってある伝言を一件一件電話し始めた。

ようやくかたがついたのは、昼食の前だった。最後の電話を切った時にはどつと疲れが出た。席についてから一度も休憩せずに電話を続けた。おかげで喉がカラカラだ。コーヒーでも飲もうと席を立ったとき、内線が鳴った。しずるはすばやく電話を取った。

「はい、営業課です。」

「営業課ですか？こちらは受付ですが、そちらの高村さんがロビーでお客様ともめているです。何とかならないでしょうか？」

しずるは頭が痛くなる思いだった。

「すいません。今から降りますので…」

と言うと、受話器を置いて事務所を飛び出した。

エレベーターから出ると、なるほど、男性の怒鳴り声が聞こえる。見ると、背が低く、めがねをかけた男が執拗に頭を下げている。怒鳴り声の内容から察するに、広告の部数の発注ミスのようなのだ。しずるは気を引き締めて間に入ってしまった。

「申し訳ありません、神田部長！」

神田と呼ばれた男は驚いた顔で仲裁に入ってきたしずるに目をやった。

「橘さん、あたしゃあんたを信用しておたくに広告をお願いしたんだ！それが、この若造が言うには部数を発注するのを忘れていたば

かりか、数も違うつて言うんだよ！どういうことだ！？」

しずるは頭を下げ続けた。

「申し訳ありません。私が留守の間、高村のほうに任せていたのですが…」

「謝られても困るんだよ！こっちはこっちでちがう部数で広告をさばかなきゃならないんだよ、もう…どうしてくれるんだ！」

「申し訳ありません！」

高村も頭を下げている。

「本当に、このたびはご迷惑をおかけいたしました。今回、高村に任せた私に責任がありますので…」

「そうだよ！元はと言えば、あんたがこんな若いのに任せるからこくなるんだよ！だいたいねえ、言わせてもらうけど、女のくせにいっぱしの営業マン気取られてもねえ。いざと言う時の責任だって、大してとてれないじゃないか！せいぜい会社を辞めるくらいだろ！あんたは辞めてそれで終わりかもしれないけど、こっちは会社がかかってるんだよ！もし潰れてしまったらあんたのせいだからな！何がうちに任せとけだ！何の取り柄もない女が、偉そうに営業回ってんじゃないよ！！」

「あんた、いい加減にしろよ。」

神田が声のしたほうに振り向いた。彼だけじゃない、しずるも高村も、ロビーにいた人間も。全員が。

そこには、カーキ色のロングコートに帽子を深くかぶった青年が立っていた。

青年はゆつくりと近づいてきた。帽子からのぞく瞳からは明らかに怒りが見える。青年は神田の前に立った。

「ちよつと言い過ぎなんじゃないか、部長さん。確かに、あんたの言う通りこの若い子に任せたそちらの女性に責任はある。だけど、言い方がなっちゃいないよ。女だからって男よりいい仕事しちゃうのか？そんな事言うって事はあんたの仕事がよっぽど鈍くさいってのを大声で回りに教えてるもんだぜ。悔しかったら……」

そこまで言うと、彼は神田に顔を近づけて言った。

「もつといい仕事するんだね、部長さん。」

そこまで言われて神田は黙っていなかった。怒りで顔が真っ赤になっっている。

「何だと、この小僧が！だいたい貴様何者だ！？そんな汚いかつこをしおって！貴様ごとき叩き潰すのは、わが社ならば簡単な事なんだぞ！その顔は覚えたからな！すぐ会社に戻って貴様の身辺調査を……」

「そんな事したらあんたが潰されるぜ、部長さん。」

神田はあつけにとられた。

「ん、何を言うかと思えば……苦し紛れのいい訳か？く、はははっ！」

「あんた、俺が誰だか、まだ気づいてないね？」

「はっ……？」

そう言うと、青年は懷から名刺を取り出し神田に渡した。それを見た途端、彼の顔から血の気が引いた。神田はガタガタと震えだしたかと思うと、凄いい勢いで頭を下げた。

「も、も、申し訳ありませんでした！！社長！！」

青年はにやつと笑う。笑いながらそつと彼に耳打ちする。

「お二人に丁重に謝っておいて下さいね。じゃないと、お宅との取引は即刻打ち切りますから……」

青年はすつと立ち上がるとロビーの外側に面したソファアの並びまで歩いていった。しずるは彼が座るのを見送ると、神田の側まで駆け寄った。高村も同行する。

「神田部長…」

しずるが話しかけると、神田は血の気の引いた真つ青な顔をしていた。とりあえず、彼女は頭をさげた。高村もそれに習った。

「申し訳ありません、この件はすぐに…」

「いや、もう結構…」

「…え？」

しずるは頭をあげた。

「これぐらいの事が処理できなければ、管理職ではないでしょう。がなりたてて申し訳ない。失礼します。」

そう言うと、一礼だけして神田は背を向けた。自動ドアから出て行く神田に一礼しながら、しずるはあの青年を探した。

まだロビーにいるかも…

その予感は的中した。彼はまだソファアに腰掛けている。しずるは高村に席に戻るよう促すと、彼の元に向かった。どこかで覚えがある。どこだったろう、そう考えながら彼女のは足を進めた。そして、彼の背中まで手が届く距離まで来ると、静かに口を開いた。

「…あの…」

青年はゆっくりと振り返った。瞬間、しずるは思い出した。

…この人、あの日の…

「借り…返しましたよ。」

彼はいたずらっぽく笑った。

「え…」

「コート大丈夫でしたか？連絡がなかったので、気になっていたんです。」

しずるは戸惑った。彼は覚えていたのだ。だが自分はすっかり忘れていた。昇平の葬儀やらで忙しかったのは事実だが。間を見て連絡などできたらうに。

「す、すいません！わたし…すっかり忘れてしまっていて…」

しずるは頭を下げた。謝るしかなかったのだ。自分が悪かったのだから…

「謝ってばかりいて…忙しい人ですね。」

そう言つと彼は立ち上がり、振り返つた。その顔は微笑んでいる。まるで昇平のような笑顔だ。しずるはそう思った。

「もし良かったら、お昼でもどうですか？近くにおいしいお店があるんですよ。もちろん…」

彼はいたずらっぽく笑つた。

「僕のおごりです。」

「ダメです、これ以上貸しはできません！私に出させてください。」

いつになくしずるは真面目に言つた。彼は肩をすくめた。

「仕方ないですね、じゃあ。お言葉に甘えましょうか。」

二人は肩を並べて歩き出した。

しずるが事務所に戻った時は、一時を回っていた。彼女が戻ってきて、回りは気にもとめないように動き回っていた。ふとホワイボードを見ると、しずるの外出欄には『営業』と書かれていた。昼休みとはいえ勝手に外出したのだ。誰が書いてくれたのか、あとで礼を言わなければ…しずるはそう思いながら席に着いた。すると、「先輩、先ほどはすいませんでした…」

高村が頭を下げてきた。

「いいんだよ、今回は私の責任。いい勉強になったわ。ごめんね。」
「つ、次は僕が…おいしい物をおごりますから…!」

高村はそう言いその場を去った。しずるがキョトンとしていると、隣に座っている美香が静かに話しかけてきた。（彼女はしずると同期だ）

「あんだ、ロビーで助けてくれた男と昼ご飯行っただって？」
「…え？」

「高村が見てたんだよ、すごいムツとした顔で事務所帰ってきてさ。それであんたの外出に営業って書いたらしいけど…迷惑かけた罪滅ぼかしらね。昼の外出は、うちの課長うるさいから。」

しずるはふと高村の方を見た。相変わらずコピーの山を抱えている。

「気をつけなよ。」

美香が再び耳打ちしてきた。

「ああ見えてあいつも男だからねえ。あんだが弱ってんの見て燃えちゃうかも。俺が助けるんだあとか言つて。」

「や、やめてよ…!」

しずるは勢いで席を立った。周りの目が一斉にしずるに向けられた。しずるは小さく「すいません…」と言って座った。横で美香が笑いを必死で堪えている。

「やめてよ！あいつはただの後輩よ、男って意識してないんだから！」

「あんたがそうでも、あいつはどうかしらねえ。」

美香は仕上げた書類を調べるとカバンにしまい込んだ。

「あんた鈍感だからねえ、高村がもしあんたを女として見てたらどうすんのよ。」

「どうって…」

「ま、もしそうなら上手くかわすんだね。じゃ、外回り行つてきやす！」

そう言つてしずるの肩をポンと叩くと、美香は事務所から出て行った。しずるは彼女を目線で見送ると、彼女の言葉を頭の中で反復させた。

…高村がもしあんたを女として見てたらどうすんのよ…

何故か重くのしかかる言葉だった。

仕事から帰る時も、帰りの電車の中でも、昼間の美香の言葉が頭を支配している。しずるは部屋の鍵を開けると、鍵を閉めそのままソファに倒れこんだ。部屋は相変わらず昇平の思い出の品で溢れていた。片付けないとなあ…しずるはそう思うが、思うだけでなかなか実行できない。ふうとため息を漏らす。昼間は美香から手痛い攻撃を食らってしまった。

今思えば、高村の事を男として意識した事がなかった。自分より二年後輩の高村は、身長こそ高いが、顔はそこそこ。ぼんやりした性格なせいとか、普段もぼーっとして何を考えているのか分からない。仕事も遅く、いつも皆にどやされている。だが、そんな高村も営業課の中では割りとムードメーカーなのだ。天然ボケというのだろうか、周りの空気を読まず行動するので、いつも大ボケをかましてくれる。それが、皆がイライラしている時などにぶつかるので皆のイライラは高村に集中する。そのおかげでイライラは消えてしまうのだ。しずるも何度かそういう事があった。なんだか不思議な存在な

のが、高村という男なのだ。

「あいつも…男かあ…」

ふとしずるは口に出した。美香の言葉はまだ頭を支配している。

『もしあんたを女として…』

…あの人は、私を女として見てくれているのだろうか…

しずるはハツとした。今、一瞬頭の中の支配が変わった。

昼間の男…金田 平助…

一瞬だが、頭の中は彼で満たさた。しずるは起き上がった。頭がフラフラする。ボーっとしながら、しずるは昼間を振り返った。金田 平助…一瞬だが彼で頭がいつぱいになってしまった。

…いけない、私は昇平を失ったばかりなのに…！もう次へ行こうとしている？そんな事ない！

そう思いながら、しずるは服を脱ぎシャワー室に入った。

翌朝、体がだるかった。やけに重たい。体温計で熱を測ると、やはり三十九度近い熱があった。おそらくシャワーの後、ろくに体も拭かずに寝巻きを着てベッドに転がり込んだせいだろう。いや、昇平の事も含め、色々と忙しかった。知らず知らずに疲れもあったのだろう。どうにも自分の不摂生のせいなのだが、今日は会社を休むことにした。課に電話を入れると、美香が電話を取った。

「珍しい！あんたが風邪なんてねえ。こりや雪がふるかもねえ…」

「やめてよ…これでもけっこうきついんだから…」

今のしずるには、例えば美香でも冗談はきつかった。冗談を冗談で返す元気がないのだ。

「ま。色々あつたんだし。結構疲れてんのよ。ゆっくり休みなさいじゃあね。」

そう言っただけで美香は電話を切った。電話が終わると、ふいに寂しさを感じた。何だか殺風景な部屋に、テレビだけがついていて。しずるはぼーっとしながら画面を眺めていた。今何時だろう。昼だろうか、もう夕方だろうか…時間だけが悪戯に流れていった。まるで、しずるだけがこの空間に取り残されたように静かだった。何もない世界。ただの静けさだけが広がる世界。

昇平が旅立った世界もこんなだろうか…

ふと、しずるは安心した。まだ、自分の中に昇平がいた。確認できた。昨日はともやりきれない気持ちでいっぱいだった。恋人を失ったばかりなのに、自分のなかではすでに違う男が入り込んできたとおもっていた。だが、かろうじてまだ昇平がいた。それだけでしずるはとても安心できた。なんだか、昇平が側にいてくれるような気がした。そういえば、いつも風邪をひくのは昇平だった。その度に、彼女が彼の家へおしかけ看病したのだ。そして、彼が治れば、今度は自分だった。そうすると、交代で彼がしずるの部屋におしか

け、色々世話を見てくれる。そんな日々が懐かしかった。でも、今は違う。愛しい人はいない。誰も自分の側にいてくれない。苦しいとき、いつも手を握って微笑みかけてくれる人は、もうこの世にはいない。

また、やりきれない気持ちが生ずるを襲った。一体、いつになったら開放されるのだろうか。生ずるの頬を、涙が伝った。だが、生ずるには分かっていた。何度悲しかったところで、何度泣いたところで、何度涙が枯れようと愛しい人は戻ってこない。彼はあまたにきらめく星になったのだ。幾千、幾億の光の粒となって、夜の空を照らし、瞬いている。そして、生ずるの姿を見つけると、話しかけるようにいつそう瞬くのだ。

（やあ、生ずる。どうしたんだい？元気がないよ。いつもみたいに笑ってよ…）

夜が早く来ないだろうか。早く星が現れないだろうか…生ずるはそんなことばかりを思っていた。夜になれば、彼の声が聞こえるような気がした。昇平の、もの優しい声だ。

ふいに、生ずるを喉の渴きが襲った。そういえば、昼から何も飲んでいなかった。ベッドから下りて、冷蔵庫まで行って開けると、何も無かった。あるものといえば、チューハイに缶ビール。飲料水などはひとつもない。

「さすがに、熱があつてアルコールはダメだよなあ。」

食器棚からコップを取り出し、水道の蛇口をひねった。水が勢よく飛び出してきた。手をさらすと、ひんやり感がなんとも気持ちいい。そのままコップに水を入れて、生ずるは一気飲みした。喉がゴクゴクと脈打つ。食道から胃にかけて、一気に冷えていった。まだ、体は水分を欲している。生ずるはもう一杯コップに注いで一気に飲み干した。キッチンを離れ、ベッドに横になると時計が目に入った。夜九時を回っている。生ずるはカーテンをめくった。今日は星空が拝めるだろうか。そう思ったが、あいにく今日は曇っていた。何も見えない。街中のイルミネーションが曇った空に反射して地上

を照らしていた。

…つまんない…

しずるは布団を頭からかぶった。

翌日になっても熱は下がらなかった。どうも今年の風邪はたちが悪い。それとも、肉体的にも精神的にも疲れきっているのだろうか？体温を測ると、やはり三十九度のままだ。ふらつきながらベッドを降りると、キッチンに行き、昨晚同様コップに水道水を満たし一気飲みした。喉を通り抜ける冷たさが、わずかながら体の火照りを沈めてくれた。

…こりや今日もダメだなあ…

そう思い、携帯を取り出して会社に連絡を入れた。今日は美香ではなく、課長が出た。珍しい事もあるもんだと思いながら、今日も休む旨を伝えると、そのまま力なく終了ボタンを押した。どつとベッドに倒れこむ。頭がぼんやりする。目の前の景色がぐらぐら揺れている。

「こりや、いよいよいかなですなあ…」

目を閉じると、そのまま眠気に誘われそんな感覚に陥る。頭の中心が何処かに落っこちてしまいそんな感じだ。

…死ぬって…こういう事なのかな…

ふと頭をよぎった。

…昇平も、死ぬときはこんな感じだったのかな？

そういえば、昇平の最後の顔は、とても幸せそうであらかだった。なんだか、微笑を周りに振りまいているようだった。一体、あの山で何があったんだろう？

いろいろと考えているうちに、本当に睡魔が襲ってきた。風邪で寝込んだときは、いつもこうなる。何か考えて追い払おうとしてもしつこく付きまとわれるのだ。しばらくの間、この睡魔と闘ったが、とうとう負けてしまった。

あゝあ…寝ちゃう…

その時、携帯が鳴った。しずるは寝ぼけながら音の主を手探りで

つかみ、通話ボタンも手探りで押した。

「…はい…どなた…」

「うわっ、ひどい声！」

電話の主は美香だった。

「え…美香？」

「そうよー、あんたどうしたの？声聞いてるだけでもかなりやばいわねーよし！愛するしずるちゃんのためだ！今日外回りがあるから、ついでにお見舞いしてあげよう！」

「まじ…？でも部屋汚いし！第一あたしお風呂入ってないから臭うよ…」

「気にするな！しばしまたれよ！」

美香は一方的に喋って電話を切った。相変わらずである。彼女の自分勝手さには正直参るが、しずるは悪くないと思っている。あんな調子だから、しずるにとっては親しみやすいのだ。どちらかというと少々引つ込み思案なしずるにとつて、彼女の存在はいい意味でのスパイスになっている。

だから友達できのよねえ…

そう思いながら、しずるはベッドから重い体を起こした。その重さと来たら、まるでスキューバのボンベを担いで起き上がったときのようにだ（彼女は一応講習だけ受けている）やっと起き上がると、美香が来るのだからせめてコーヒーぐらい…と思いながらキッチンまで歩いて行った。ヤカンに水を入れてガスかけると、ピンポンとインターフォンが鳴った。

「まさかね。」

美香がもう来るわけないだろう。そう思ってドアフォンをとると、受話器から聞きなれた声が聞こえた。

「毎度ー！営業課アイドル、美香です！」

「え…もう来たの…？」

「そんな言い方ないでしょ？せっかく来たのに！早く開けてよー！荷物超重いんだから！」

またまた一方的に言われながら、しずるは玄関を開けた。すると、そこにはスーパーの買い物袋を抱え込んだ美香が立っていた。

「ちーす！」

ひさびさの美香の笑顔だ。しずるもならって「ちーす。」と返す。

「あんたがさ！くたばってんだろうと思って、色々買い込んできたの！熱があれば外も出歩けないだろうしさ。とりあえず、飲み物と栄養がありそうな食材ね。しんどい時は、栄養ゼリーも買ってあるから飲んだらいいわ。それから、あんた病院行かないだろうから風邪薬！しっかり休みなさいよ！」

そう言って、買い物袋をしずるの手に渡した。

「これって…ていうか、いつ出てきたの？」

「へへ。実は電話したの、買い物終わってからの。今日は得意先周りだけだったし、そんな忙しくなかったからちよつと早めに出てきたんだ！友を思つての行動！感動したか！！」

しずるはちよつと感動した。いつもはとっつきにくく、口癖しい彼女だが、こういうときにはいつも面倒を見てくれる。頼りがいがあるのだ。しずるは思わず「美香最高！」とぼそつとした声で言った。

「ん？何て？」

美香が聞いてきた。

「うっん！なんでもない！」

「そう、ならいいけど。」

そう言って腕時計を見ると、美香は「やばい！」と言った。

「ごめん！もう行かなきゃ！相手先に午前中には伺うって言つてんのよ！突然お邪魔してごめんね！」

「うっん、こつちこそありがと。早く治すね。」

しずるがそう言つと、美香は「この際だから、一週間くらい休んじやいな」と言つて、マンションの廊下を駆け出した。足の速さはかなりの物だろう。すぐに見えなくなつてしまった。

美香がいなくなると、急に廊下が静かになった。しずるはとりあえず戸を閉めて、ソファにでも横たわりながら、美香のくれたお見舞いの中から栄養ゼリーを取り出して一気に飲み干した。それからこれも美香のくれたものだが、風邪薬を口に入れ飲み込むと、そのままベッドに入った。

一人でベッドにいと、無性に寂しくなる。しずるは昇平のことを考えた。

出会ったとき。

初めてデートしたとき。

初めて昇平に抱かれたとき。

喧嘩したとき。

一緒に映画を見て泣いてからかわれたとき。

二人で飲んで部屋に帰ると、そのまま抱き合って眠ったとき。寝ているとき、背中からそつと昇平が抱きしめてきたとき。

その時、なぜかしずるは誰かに抱きしめられている気がした。

この感じ…昇平なのかな…暖かい…

しずるはそのまま眠ってしまった。

翌日、ベッドから起きると体が軽い。まだふらつき感が残っているものの、頭痛はしなかった。若干のどが痛むが、それも気になるほどではない。試しに体温計で熱を測ると、

三十六度二分…

熱は引いていた。美香が持ってきた薬のおかげだろうか。それとも…

あのぬくもり…

しずるは、ふう…とだけ息を抜くと風呂に向かった。ここ何日か風呂に入っていない気分だ。風邪のためとはいえ、このまま出社するわけには行かない。時計はまだ七時前…急いでシャワーを浴びれば余裕で間に合う時間だ。

…いつまでも休んでいられないもんね…

しずるは、シャワーを浴びながらつぶやいた。

久々の出社である。といっても、風邪で休んだのはほんの二日だが…

事務所に入ると、「おはようございます。」と少々声を張り気味で出した。するとどうだろう、皆が一斉にしずるに注目したではないか。しずるは頭をかしげながら課長の席に向かった。

「風邪で二日間休ませて頂きました。申し訳ありません。」

しずるは深々と頭を下げた。

「いやいや、かまわんよ。橘は日ごろからよくやっているし…あんなこともあったんだ。今回は目をつぶらせてもらっよ。それより…」

課長の声が少し小さくなった。

「橘君…君、あの方とはどういった関係なんだい？」

「は…?」

しずるは彼の言っている意味が分からなかった。

「いや…だから、彼だよ。」

「彼…？」

このままでは一向に話が通じないと見て、課長は思い切って聞いた。

「浪漫堂の金田社長だよ…」

「ああ…」

「ああ…じゃないよ…君が休んでる間、社長から君宛に電話がかかってきてね。うちと新しい広告で契約したいとおっしゃっているんだが…」

「…しなかつたんですか…？」

しずるの問いに、課長は少々困った顔で言った。

「…君じゃないと契約しないとおっしゃっているんだよ。君が担当がいらいらしい。おかげで篠田はふてくされてねえ…」

篠田というのは、しずるの一つ先輩で課のエースだ。営業は確実に取るというので有名である。時には、他の者の仕事まで横取りするのだから、皆から「営業ハンター」とあだ名されていた。その彼が今回は取れなかったのである。課の方針として、電話を取ったらそれが契約の場合、基本的に電話をとった者が担当になる決まりだった。だが、浪漫堂の金田氏はそれを拒否したのだ。

「篠田は電話口で君じゃないと契約しないと言われ続けたようですね。あの有様だよ。」

課長が目を向けると、そこにはぶすつとした顔で新聞紙を開いているメガネ顔の男がいた。彼が篠田だ。一瞬しずると目が合うと、ふん！といって顔を背けてしまった。

「なあ…あの様子だと周りがピリピリしすぎて仕事にならないんだよ。君、頼むから一言だけ謝っておいてくれないかな？」

「えっ！あたしが…ですか…」

しずるは思わず声を上げかけた。この課長、人はいいんだが少々気弱なところがある。しずるは、はあ…とため息をつく、「分かり

ました。」と言つて篠田のもとへ向かつた。

近くまで来ると、篠田はかなり虫の居所が悪いのか、周りに八つ当たりしていた。

「おう！お前ちよつとコーヒー入れてこいや！高村！昨日の会議の報告書コピーしてもつてこい！すぐやぞ！！」

この関西弁で怒鳴り散らしている男。篠田義人はしずるの苦手なタイプだった。自己中、わがまま、プライド高し…それでいて女好き…（実際、毎年新人で気に入った子がいれば即アプローチをかけるのだ）しずるの嫌いな要素盛りだくさんなのである。その男に謝るのだ。

…やっぱり休めば良かった…かな…

しずるはちよつぴり後悔した。だが、その後悔も次の怒りに変わる。篠田がこつちを振り向いた。

「何や？お前。」

その言い方に少し力チン！と来たが、そこは堪えた。

「いえ、今回はご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。」

「

しずるはぺこりと頭を下げた。だが…

「何や。自分の手柄自慢かいな？」

「はあ…？」

しずるは顔を上げた。

「あのなあ、別にお前に仕事とられたか何ともあれへん！それよりもな、頭来るんは、わざわざお前が謝りに来たつちゅうこつちや！」

この男、相当のひねくれ者である。

「今回はご迷惑をおかけしました？別にかけられてへんわ！！大した仕事もせんのもう言うわ！いちいちなあ、仕事のことで謝りに来んにつてくれるか！？悪いとも思つてへんくせに！」

「わ、私…」

悪いと思つたから…そう言おうとしたら、篠田の次の言葉にかき

消された。

「それにな、婚約者が死んだからって周りがちやほやしてくれる思うなよ。」

そう言うつと、篠田は「コーヒーは！？」と言いながらその場を立ち去ろうとした。その彼に向かって、しずるは吼えた。

「そんな事思つてません！！」

しずるの声は、課内だけではなく、そのフロア中に響いた。驚いた篠田は…いや、課内の者全員がしずるを見た。

しずるは、今にも泣きそうな気持ちをこらえて、震える唇と押さえ、言つた。

「そんな事…思つてません…！！」

小さいが、はっきりとした口調でその言葉は出てきた。しずるの目は、篠田を捉えたままだ。ギリツと睨みを利かせたその目は、篠田を怖気づかせた。

「あ、あほか！そんな、大声出さんでええやんけ…」

少々引き気味の篠田の言葉は、負け犬の遠吠えのようだった。しずるは、しばらく篠田にきつい視線をおくると、クルツと向きを変えて取り囲む人を掻き分けながら自分の机に向かった。

やっと席に落ち着くと、何やら見慣れないものが机に置いてあった。

「??？」

十センチ四方だろうか、少々小さめのラッピングされた四角い包みが置いてあった。飾りの上にはメッセーじカード…

「それねえ、浪漫堂の社長さんからのお見舞いよ。」

隣的美香が小声で言ってきた。

「え…」

「あんたもてるわねえ…みんなにばれるとまずいからって、私に預けに来たのよ。」

「い…いつ？」

美香は、机の書類を整理しながら言つた。

「あんたが休んだ初日。ほら、篠田が電話で断られたでしょ。あのあほ、そんな時にあんたは風邪で休んでる。なんて言ったもんだから、夕方いきなり来てさ。焦ったわよー！まあ、たまたま外回りの帰りに私がロビーで会ったから事なきを得たけど。堂々とお見舞いに来られたら、今頃あんたの机無かったかもね！」

悪戯っぽく笑うと、美香はカバンを持ってさっさと立ち去ってしまった。それを見送ると、しずるは机の上の品物からメッセージカードを取った。そこには、

お大事に…

とだけ書かれている。

…お礼言わないと…いけないよねえ…

そう思いながら、しずるはその包みを引き出しにしまった。

午前中を使って、しずるは休んでいた間の書類整理をした。後輩に任せてもいいような簡単な仕事もあったのだが、自分でやってしまうことにした。取引先と少々揉めそうな内容だったのだ。

…これぐらいはやらせてもいいんだらうけど…

ふと高村を見た。相変わらず課内のコピーをしまわっている。あれではまるで使いつぱしりだ。周りも仕事を教えるつもりはなさそうだ。篠田は…いない。ホワイトボードを見ると、

外回り。

とだけ殴り書きしてあった。今日は帰ってこないかもしれない。…いつか、悪い事したわけじゃないし。

ふうと息を漏らした後、机の引き出しをそつと開けた。中からは、美香から手渡された小さな包みが姿をみせる。それからメッセージカードを抜き取ると引き出しを閉めた。

しずるは席を立ち上がり、ゆっくりホワイトボードに向かった。

そして、その前に立つとペンを取り、

昼食…

とだけ書き、事務所を出た。

しずるの所属する広告会社は三十階建てのビルの十階にある。フロア丸ごとが会社の敷地だ。中には、外注担当、経理事務、営業課が入っている。本社…というわけではなく、本社そのものは郊外にある工場に隣接している。ただ、街中に支店のようなものがあれば、営業等の外回り関係は移動が楽だろうということと、このビルが完成した時点でこの三課だけ移動したのだ。しずるが入社し、営業に配属が決まったときにはこのビルの中にすでに存在していた。

しずるは初めてここに入ったときに驚かされた。ビルの中央は最上階まで吹き抜けになっていて、その縁に沿うようにエレベーターが天高く伸びている。その吹き抜けから注ぐ光はとても気持ち良く、

しずるは仕事の合間に休憩する時など、よくこの吹き抜け沿いのベンチに腰掛けてコーヒーを飲んでいる。お気に入りの場所なのだ。その例のベンチに座ると、しずるはポケットから名刺と携帯電話を取り出した。携帯を開くと、ゆっくりと相手の番号を押す。手が震える。緊張しているのか…そつと受話スピーカーを耳に当てた。

プルルッ…プルルッ…

呼び出し音が聞こえる。けっこう長い。今は都合が悪いのか…このまま出ないだろうか。正直出て欲しくないという気持ちもあった。だが、その願いも空しく、相手が電話を取る音がした。

「あ、あの…」

『…ただいま電話に出る事ができません…』

留守電だった。しずるは少し落胆し、携帯電話の終了ボタンを押すと、そのままベンチに深くうなだれた。

なあにやっつてんだろ…変に期待でもしちゃってるのかな…

ぽーっと吹き抜けの光を眺めていた。やっぱりここから見るこの光景は落ち着く。しずるは、光をうつとりしながら見つめていた。向こう側に誰かいたら、きっと勘違いするだろうだろう。

このまま時間が無くなればいいのになあ…

そう思っていると、電話が鳴った。しずるはあわてて電話を取り出すと、相手の番号を確認した。…さっきかけた番号からだ。

しずるは、いささか緊張しながら通話ボタンを押すと、そつと耳元にスピーカーを当てた。

「あ、あの…田口印刷の橘と申します…」

『…どうも、ご無沙汰しています。風邪、良くなったんですね。良かったです。』

電話の向こう、浪漫堂の金田の声だ。なんだか、ふと安心してしまった。何故だか分からないが、目から涙が溢れてきた。しずるは、しゃくりあげながら返事をした。

「は、はい…おかげさまで…ご迷惑をお掛けしました…それと…お見舞い…ありがとうございます…」

最後の方はしゃくりすぎてほとんど言葉にならなかった。何故だか分からないが、金田の『良かった』の一言が妙に心に張り付くのだ。その言葉が、しずるのぽっかり空いた心の空白を埋めた。それが、不思議としずるには分かったのだ。

『大丈夫ですか？まだ、お体の具合が…』

「いいえ、違ふんです。はい、違います。何でも…大丈夫です…」

少しずつ息を整えながら、しずるは落ち着きを取り戻していった。不思議だ。金田の声を聞くと心が休まる。この場所の効果もあるのかもしれないが…しずるは気を取り直して、電話に声を張り上げた。
「金田社長、この度は…」

だが、金田に遮られてしまった。

『まだ病み上がりのようですねえ、無理はいけませんよ。あなたはいつも無理する性格のようですね。ちゃんとお体が治ったら、お話ししましょう。』

「いえ！大丈夫です！今日お電話したのも、ご指名を頂いたと伺ったので…」

そこまで言うと言金田が笑った。

『あはは！指名だなんて、僕はあなたなら気持ちよく仕事ができるとおもったんですよ。そこまで言うならもう大丈夫そうですね。午後は空いていますか？僕から伺いますので…』

今度はしずるが遮った。

「いえ！私が伺います！ご住所は、以前頂いた名刺のとおりでよろしいですか？」

『せっかちな人ですねえ、分かりました。僕の会社の近くにホーリーナイトって言う喫茶店がありますから、そこでお会いしましょう。時間は…』

しずるは約束の時間を確認すると「失礼致します」と言い、電話を切った。切ったら、何だかどっと疲れが出た。

…金田って人、疲れるなあ…何であんなに見透かされるんだろう…ふうとため息をついたらお腹が鳴った。そういえば今は昼休憩な

のだ。まずい、時間はもう十二時半を過ぎている。今から外で食べたんでは一時を確実に過ぎる。どうしようか…外回りの間に食べるか…

悩んでいるところに「どうぞ」という声と共にサンドイッチとパックコーヒーが出てきた。顔を上げると高村が立っていた。

「お昼…ちよつと多く買いすぎたので…」

と言うと強引にしずるの手に渡した。

「今度は、もっと上手い料理を奢ります!」

そう言つと、高村は足早にそこを去って行った。

しずるはしばらくポカんと高村の後を眺めていた。

いつでもそうだが、取引先との初めての打ち合わせは緊張する。

最初で、相手のイメージを読み取らなければならない。相手が色々喋ってくれば楽に進むが、あまり喋らない、口下手なタイプは困る。こちらがリードして煮詰めなければならないからだ。結果、向こうの想像している完成図とは程遠く、上手くいってもイメージの半分までが限界だ。

しずるは正直言つて口下手な相手は得意ではない（誰でもそうかもしれないが…）だが、そういう相手が自分のスキルをアップさせてくれることも充分分かつている。しずるがこうして仕事を続けられるのも、過去の失敗に励まされてきたからだ。

「おや？何の資料ですか？」

しずるが机で資料を整理していると、横から美香が割り込んできた。

「これ？浪漫堂の社長と打ち合わせするのにね。過去のデザイン引っぱり出してみたの。」

「て事は…初打ち合わせ？」

美香が怪訝な顔で言い寄る。

「…そう。ほら、あの人って、何だか自分からいろいろ言つてきそうなタイプには見えなかったから。だから、こっちで資料を用意しとけば色々参考になるかなっと思つて。」

ちよつとはにかみながら、しずるはカバンに資料を詰め込んでいく。その様子は、美香には少々はしゃいでいるようにしか見えなかった。そのせいか…

「ねえ、あんたさあ。その資料たち…裸で持つてくの？」

「…え？」

気の抜けた顔で返事をするしずるを見て、美香は呆れたように言つた。

「あんだねえ、せめてバインダーかなんかにはさんでからカバンに入れないよ！そのまんま突っ込んだら、資料が中でぐっしゃぐしゃだよ！」

「え…ああ！」

そう言われたしずるは、自分のカバンを覗き込んで思わず声を上げた。さっき詰めた資料たちは、美香の言うとおりぐっしゃぐちゃである。「…しまった…」と言いながら、しずるはカバンから紙の束を取り出し、慌てて折れ曲がっているもの、いないものに仕分けし始めた。その様子を見て、美香はなんだかじれっなくなってきた。ふと時計を見ると、時間は午後二時半を回っている。

「ねえ、しずる。あんだ、打ち合わせって何時の予定なの？」

「え？」

そう言われ時計を見ると、一瞬でしずるの顔が青ざめていく。

「やっばい！打ち合わせ三時なの！！」

美香は一瞬で体中から力が抜けた。

「何やってんのよ！ほんとおっちょこちよいなんだから！もう仕分けたの？ほら！仕分けたんならさっさとバインダー閉じてカバン突っ込んで黒板に走る！」

美香に怒鳴られ、しずるは慌てふためきながらカバンに資料を閉じたバインダーを詰めて、「行つて来ます！」と言って、事務所から走り去ってしまった。

「…黒板…」

そう言つて美香はため息をついた。しかし、いつも可愛がつていゝるしずるだ。仕方ないかと自分に言い聞かせながらホワイトボードに近づくと、美香より先に高村がしずるの欄に「外回り」と書き込んだ。美香はニヒルに笑い、腕を組みながら話しかける。

「ねえ、あんださあ。惚れた相手間違つてんじゃない？」

「間違えたかもしれないですねえ…」

そう言われた高村は、しずるが走り去って行ったほうを見て言った。

好きなんだねえ…あのおつちよこちよい…

美香はそう思いながら自分の机に向かった。

会社を出たしずるの前に、運良くタクシーが止まっていた。後ろの席には客はいない。しずるは、窓を軽くノックすると、ドアを開けてもらい乗り込んだ。

「すいません！。町のホーリナイトって喫茶店までお願いします！」

分かりましたと言いながら、運転手は滑らせるようにタクシーのアクセルを踏み込んだ。

何だか、ドキドキする。走って事務所を飛び出したからだろうか。心臓の鼓動が激しく胸を叩く。少し息が荒くなっている。自分でも気付かないくらいだ。

何だろう、このドキドキ…

なんとなくだが、しずるはこの高揚感を覚えている。初めて昇平とデートした日。待ち合わせ場所で一時間も待たされた。雪がちらつく十二月二十四日。周りの人たちは腕を組んで歩き、しずるの側を通り過ぎて言った。街はイルミネーションで彩られ、華やかに輝きを放っている。その中に一人だけ、しずるは待ちぼうけをくらっていた。気温は低く、着込んできたつもりだったが、容赦なく体温を奪われていく。次第にガタガタと震えだし、もう帰ろうと思った瞬間、遠くから手を振る人が見えた。手には大きなぬいぐるみ。昇平だ。昇平は、しずるの前に来るなり言った。

「遅れてごめん！どうしてもこれを渡したくて！」

そう言われ。しずるの腕の中にぬいぐるみが入り込んできた。大きな、熊のキャラクターのぬいぐるみだった。昇平との出会いは友達の話だったが、そのときにこのぬいぐるみが好きと言ったことを、昇平は覚えていたのだ。

「メリークリスマス！」

昇平はニコツと笑った。屈託のない、少年のような純粋な笑顔。

しずるは、この笑顔がたまらなく好きだった。宝物だった。

窓を覗き込むと、あのケーキ屋が目に入った。あの日以来、ここには来ていない。行くとあの日に戻されそうだったからだ。ふいのため息がこぼれる。その様子を、運転手はチラチラツとミラー越しに覗いていたが、何も話しかけてこなかった。正直、ほっとした。

三十分ほど揺られただろうか。目的地に着いたようだ。しずるは、運転手に料金を払うと「ありがとう」と言ってタクシーから降りた。ドアが閉まり、タクシーが走り去った先には、「ホーリーナイト」とカタカナで書かれた看板を掲げた、古ぼけた小さな喫茶店があった。

しずるは、静かに喫茶店の扉を開けた。店内は明かりがかすかにもつている様で、しかし、薄暗かった。だが、しずるはこの雰囲気が何となく気に入った。こういう、レトロというのだろうか、時代を少し遡った雰囲気は、彼女にとって不思議と落ち着く空間なのかもしれない。

店内に目をやると、カウンターではぶきつちよそうなマスターが「いらつしゃい。」と皿を拭きながら声を掛けてくれた。しずるは軽く会釈すると、窓際を見た。そこには三つほど机が並び、その一番奥ではカーキ色の服を着た青年が（…帽子をかぶっているので恐らく…）読書にふけていた。しずるは慌ててその机まで駆け寄ると、ばつと頭を下げた。

「申し訳ありません！遅刻…してしまいました…」

金田はふつと笑うと、手を差し出した。

「ま、掛けて下さい。立ったままじゃ、コーヒー。飲みにくいですよ？」

「…え？」

「どうぞ、掛けて。」

しずるはきよとした感じで、勧められるがまま席についた。

「時間のことは、気にしないで下さい。僕の都合に合わせてもらっただ。謝る必要はないですよ。先に着いてしまったから、コーヒー飲んでただけです。」

金田がそう言うのと、あのぶきつちよマスターが、お絞りを持ってきたながら言った。

「何を言ってるんだ。社長んとはここの上じゃないか。先に着いたって、三十分前からコーヒーすすって本読んでただけじゃない。」

伝票を手に、マスターが叫びながら席にやってきた。

「それ…言わない約束ですよ！」

金田が人差し指を口元にやり、シーツとした。

「ま、うちはいいいんだけど。お嬢さん、ここ初めてだね？何をお飲みになるかな？」

「あ…えつと…」

「この店、メニユーが無いんです。マスターに飲みたいコーヒーを言えば、適当に入れてくれるんですよ。」

しずるが戸惑っていると、金田がそつと耳打ちしてくれた。

「あ、じゃあ…カプチーノを…ありますか？」

「イエス、マドモアゼル！ここ、ホーリーナイトに無いコーヒーは御座いません！少々お待ちください。」

そう言って一礼すると、マスターはサツとカウンターに戻り、豆をすり始めた。ちよつと苦味を含んだ、香ばしい香りが辺りを漂う。「変な人ですけどね、入れるコーヒーは世界一うまいですよ。」

金田が話しかけてきた。帽子から目が見え隠れするたびにしずるはドキドキしてしまう。ちよつと顔が熱い。紅潮しているのだろうか。メイクしているから、分からないだろう。店内もこんなに暗いし…

「はい、カプチーノ！」

突然、しずるの目の前に入れたてのカプチーノが現れた。驚きのあまりマスターを見上げると、マスターは軽くウインクして「ごゆつくり…」と言うと、さつさとカウンターに引っ込んでいった。一瞬間が空くと、金田が切り出した。

「どうぞ、まあ、ゆつくり飲んで下さい。」

金田に勧められるまま、しずるはカプチーノを口にした。瞬間、濃厚なミルクの味がふわつと口の中に広がる。しずるは思わず声を上げた。

「おいしい！」

「でしょ。人は悪いけど、コーヒーは絶品なんです。」

金田が笑いながら言うと、ゴホン！と咳払いが聞こえてきた。し

ずるも金田にならって笑っていた。しずるは「あ、そうだ。」と言うと、カバンから書類を取り出した。

「社長、この度はわが社を選んでいただきありがとうございます。遅れましたが、私、営業の橘と申します。」

そう言っしてしずるは名刺を取り出し、金田に渡した。金田はそれを無造作に受け取った。それに、しずるは少々戸惑いを感じたが、冷静を保ちながら書類を並べ始めた。こうでもしないと、何だか胸がはちきれそうなのだ。何だか…である。理由はしずるにも分からない。しずるは、説明を続けた。

「当社としましては…今日を始めに何度か打ち合わせを重ねたいと思っております…」

「それ、ちよつと待った。」

「え…？」

すると、金田は一冊の本を取り出した。何かの雑誌のようだ。表紙には、どこか南国の風景の写真が使われている。

「これ…」

「？」

「うち、輸入雑貨の会社ですよ。だから、イメージとしてはこんなのにしたいんですよ。なんていうか、こう…パラダイス？ここに来れば、安らぎや癒しが詰まってる…そんなアピールをしたいんです。」

金田は雑誌をしまいながら続けた。

「…できます？」

しずるは思わず叫んだ。

「も…もちろん！」

そう聞いた金田は、またにっこりと笑った。

「良かった。あなたにお願いしたかったんですよ。あなたなら、きっといいものを作ってくれると思ったから。」

それを聞いて、しずるはちよつと涙が出そうになった。これは最高の褒め言葉だ。今まで何度言われただろうか。数えるほどしか

いような気がする。だが、同時にプレッシャーでもある。ここまで期待されているのだからそれに応えなければならない。しずるは自然と気合が入った。だが…

「社長！では…」

「あ、もう仕事の話は終わりにしましょう。コーヒー飲みませんか？あ、カプチーノか！マスターー！」

いまいちつかめない…しずるはそう思った。

そして、そのままカプチーノを飲み続け、打ち合わせ初日は終わったのだ。

「は？じゃあ、最初の三十分だけ打ち合わせして、後はコーヒーすすってたわけ！？」

着替えながら、美香は声を上げた。

「…いや、まあ…そうかな…」

「…呆れた…普通もうちょっと煮詰めてから終わるでしょ…それを一冊の雑誌で片付けられるなんて…」

そう言つて、美香は更衣室のロッカーを少し乱暴に閉めた。

「もうちょっと考えな！あんた最近おかしいよ！」

そう言い残すと、美香は更衣室からさっさと出て行つた。

その姿を見送りながら、しずるはふと美香に言われた事を思い出した。

「…あんた最近おかしいよ…」

確かにそうかもしれない。やや浮き足だっている自分がいるのだ。その理由はしずるにも何となく分かっていた。

浪漫堂の社長、金田である。

何故かは分からないが、しずるはそう思った。たまにだが、金田と昇平がダブって見える時がある。今日の打ち合わせでもそれがあった。金田がコーヒーを飲む時の仕草などはそっくりだった。かた肘を突いて、その突いている手の方で昇平はコーヒーをよく飲んでいた。考えれば考えるほど昇平にそっくりだ。プレゼントに一言だけ書かれたメッセージカードが入っていたり、あんなちょっとレトロな喫茶店を好んだり…

「…よく似てる…か…」

しずるの口からため息がこぼれた。その音は、しずるしかない更衣室の静寂の中にゆっくりと染み渡って行つた。昇平の葬儀から一ヶ月程度しか過ぎていないが、なんだかとても濃い一ヶ月だ。しばしば昇平の両親から連絡が来るが、彼女からは連絡を一切しない

ようにしていた。戻れなくなりそうだったからだ。出来れば、昇平という過去にすがり付きたくないと思っっている自分がいる。反面、いつまでも思い出に浸っていたい自分がいる。その間で苦しんでいる自分もいる。だから、しずるは昇平の両親を避けていた。両親も傷ついているが、しずるも同じだ。きっと、心配して連絡をくれるんだろぅが、その優しさは逆にしずるの心の傷をこじ開けていた。でも、他人だものね…

しずるは自分にそう言い聞かせると、ピョン！と椅子から飛び起きた。時計を見ると八時を過ぎていた。しずるは更衣室のドアを開けた。ひっそりと静まり返った廊下に人影が一つ。

高村だ。

しずるは近づき、声を掛けた。

「お疲れ、どうしたの？誰か待つてるの？」

しずるの問いかけに、高村は少々くぐもった感じで答えた。

「あ、あの、先輩を待つてたんです。」

「え…？」

しずるは一瞬ドキリとした。

「飯、奢るって、約束しましたから…」

「…あ…」

しずるは思い出した。この間の神田部長の件である。あの時は、しずるも軽率な行動をしたと思っっていた。本当は落ち込んでいた後輩を励まさなければならなかったのに、のこのこと金田と食事に行ったのだ。しずるは、少し意地悪気に上目遣いで高村を覗き込んだ。

一瞬、高村は目を逸らした。

「あ、あんまり高いところは駄目ですけど…奢ります…！」

しずるはニコツと笑った。

「じゃあ、今日は高村に甘えようかな。美味しいところ、連れてつてよ。」

彼女がそう言うと、高村は思わず照れながらはにかんだ。

「じゃ…じゃあ、行きましようか！」

高村は言葉通り、高くない店にしずるを連れて来た。そこは路地を一本入ったところにあるラーメン屋だった。店の中は狭く、隣で中年のサラリーマンが忙しそうにラーメンをすすっている。しずるはちよつとがっかりした。

せめてファミレスだろ…

心の中で高村に文句を言っていた。だが、当の本人はしずるの気持ちなど露知らず、「ギョーザうまいんすよ！」「ここは醤油もいいけど、味噌も最高なんです！」「といきまいていた。とりあえず、注文をした。高村は本人おすすめの味噌ラーメン。しずるは普通の醤油ラーメン。それにギョーザを一人前（これは高村がほとんど食べってしまった…）

「はいよ、お待ち。」

これまたぶきっちょそうな店長が頼んだラーメンを出してくれた。見ると、店の雰囲気とは打って変わって上品な香りと盛り付けである。しずるはスープをすすった。

「…おいしい…」

「でしょ！ここ学生時代から来てるんですけど、もう最高なんですよ！」

高村が嬉しそうに言った。その顔は、いつも会社でみる顔とは違っていてとてもいきいきしている。

こいつ…こんな顔するんだ…

いつもと違う高村を見たしずるは、なんだか嬉しくなった。会社では皆にいじめられている感じが、この店の中ではなんだかひときわ輝いて見える。その顔を見たしずるは思わず微笑んだ。それを見た高村も微笑み、だが、真剣な顔で口を開いた。

「先輩、僕…こんな頼りないですけど…なんかあったらいつでも相談して下さい。先輩はいつも頑張っています。あんなことがあったのに…頑張ってます。そんな先輩の力になりたいんです！だから、

いつでもいいです。僕でよかったら、いつでも話して下さい！…話しかけないですけど…」

高村にとっては最高の励ましなのだろう。最後のほうは声が震えているのが分かった。それを聞いたしずるは、胸が熱くなった。高村にこんなことを言われるのが意外で、でも何だか嬉しくて…しずるは箸を手にしたまま動けなくなってしまった。

「あれ？どうしたんですか？先輩？」

「あ、ううん、何でもない！ありがとね！ラーメン食べよ、伸びちやうよ！」

そう言って、しずるはラーメンを口にした。

何だか、とても暖かい気持ちになった。

「で…社長とは最近どうなの…？」

「…え？」

美香の唐突な質問に、しずるは戸惑った。

「どうって…」

「打ち合わせは順調なのかって聞いているの！」

何勘違いしてんのよ！と言った感じで膨れる美香を見て、しずるは「ああ」と手を叩いた。

「もう二ヶ月は経ってんでしょ…もうすぐゴールデンウィークよ…初版の原版だってまだなんでしょ？」

「ん…もうそろそろ出来るんだけどねえ…」

そう言いながら、しずるは持っていたカバンからメモ帳を取り出した。ページをぱらぱらとめくると、赤く印しのついたスケジュールが目に入る。

「うん、もう刷り上げるよ。明日の予定！」

「お！のんびり屋のしずるにしちゃ、手際がいいじゃない！」

「のんびり屋って何よー！」

ふざけて美香の腕を叩く。

「痛い痛い！ もう勘弁してよ！ とにかく、今日は付き合ってもらうからね！ いつものバーで…」

そう言って、美香はウインクし立ち上がる。

「はいはい、また後でね！」

書類をまとめて外回りに出る美香を、しずるはおどけながら見送った。

美香と仕事帰りに飲みに行くのは久々だった。恐らく、半年近く行ってない。しずるも、この頃になってようやく落ち着きを取り戻しつつあった。相変わらず、部屋の中は昇平の思い出でいっぱいだ

が…とにかく、今日は美香に付き合っのが前提だが、しずる自身も少々ハメを外すつもりである。場所はいつもの所…二人が行きつけにしているカクテル・バー「フィレンツェ」だ。

「いらっしやい。」

二人がドアをくぐると、落ち着いた声が出迎えてくれた。

「マスター！久しぶり！」

そう言って、美香は投げキッスを飛ばした。マスターはそっけなく、しかし、僅かに微笑んで会釈した。二人は、いつもの場所…カクテルの一番隅っこに陣取った。ここならば、誰にも邪魔されず、静かに心行くまで飲めるのだ。

「ご注文は？」

マスターが注文を取りに来た。美香は、声を少し絞りながら

「いつもの…お願い！」

と言った。それを聞いたマスターは、美香としずるを眺めて、

「久しぶりだね、一杯目は僕のおごりにするよ。」

そう言っで、にっこり笑った。二人は「やりい！！」と言っで、手を叩いた。

「やっぱり、ここ最高！」

「だよね〜！カクテルもおいしいしね！」

談笑していると、注文した品がやってきた。マスターは、二つのカクテルを並べると、間にピザを置いてくれた。美香が思わず聞き返す。

「マスター？これは？」

「久々に来てくれたからね、それもおごり！」

二人は声を合わせて「おー！」と歓喜を上げる。お腹もすいていたから腹ごしらえにはちょうどいい。二人は早速出されたピザをカッターで切り、小分けして行っった。

「じゃ、乾杯！」

「乾杯！」

二人はグラスをカチンと鳴らした。しずるにとっては、本当に久

々の飲みだ。色々とあったのでとても落ち着いて飲みに行ける状況ではなかったのだ。最近になって、ようやく気持ちにもゆとりが持て、余裕を持つて人に接することができるようになってきた。しずるは久々にカクテルをのどに流すと、何とも言えない香りに心が震えそうだった。

「はあ…おいしい…」

思わずため息をつく。

「ぷっはー！ 上手いー！」

美香はそう言っただけでグラスをドン！と置いた。見ると、からっぽである…

「これが五臓六腑にしみる…ってやつよねえ。」

くう！ とガッツポーズを取ってから、グラスをブンブン振って「おかわりー！！」と叫んでいる。

「よく飲むわね…もうちょつと味わったら？」

「そんな、短い時間しか飲めないのよ！ 味わってる暇無い！！」

しずるは呆れてしまった。いくら久々とはいえ、ビールじゃないんだから…自分はしずかにグラスの中のカクテルを飲み続けた。

「あんた、最近元気になったよね？」

「…え？」

美香の突然の問いかけに一瞬戸惑った。

「どういう…意味？」

美香は静かに微笑んだ。

「いやあ…なんていうかさ。最近元気というか…いい感じというか…彼が亡くなった時は、あんたも死んじやいそうなのがしてね…」
それを聞いたしずるは、少し首を落とした。美香が慌ててなだめる。

「ごめん！ そんなつもりじゃなくて…ええっと…最近のしずるはさ…」

「大丈夫…」

しずるは顔を上げた。その顔は、少し悲しそうでもあったが、ど

こか力を感じさせるような顔つきだ。

「もう、大丈夫。今までごめんね。昇平のことは自分の中でも一応のけじめはつけてるし…今は仕事を頑張ろうって思ってるの。いつまで働けるか分からないし…好きな仕事だから、後悔もしたくない。」

そう言うしずるの顔は、どこか強い決心が感じられた。鈍くて有名な彼女ではない、どこか強くなったしずるがそこにいる。美香はそう思った。そして、何だか、そんなしずるがかわいそうで、かわいくて…変な感情に支配されてしまった。美香の目からは涙が溢れている。

「しずる！今日は飲もう！とことん飲もう！！朝まで付き合ってやる！」

そう言うと、美香はマスターが運んでくれたおかわりをその場で飲み干し、「おかわりー！」と叫んでいた。

「あ、ちよつと！美香！」

おかわりが待ちきれない美香は、しずるのグラスも空けてしまった…また叫んでいる。

でも、なんだかとても心が落ち着いているしずるであった。このまま時間がゆっくり流れればいいのに…美香を見ながら、しずるはそう思った。

…しかし、当の本人はおかまいなしに暴走を続けている…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3177d/>

12月のラブソング

2010年10月10日13時53分発行